

平成25年4月5日発行(毎月6日1日発行)
第53巻4月号(通巻445号)

風土



4

田螺鳴く

神蔵

器

三尺を飛び初蝶か冬蝶か

センベイを噛めば春来る音のして

冴返る伝日光作「翁」かな

吹きて廻す柵の葉の風車

一・二枚日ののこりをり田螺鳴く

春暁の机の上の眼鏡かな
青き踏む一步一步に仏かな
一村をたたき起して辛夷咲く
似合ふとも花の御手の念珠かな
啓蟄や藪の中なる芭蕉句碑
その昔結核病棟すみれ咲く
西行忌とくとくとく泉手に掬ふ



竹間集

同人作品



藁の香

島谷 征良

道に出て枯蟻螂の吹かれをり
茶島に影を落しぬ冬桜
炉の炭の爆ぜて話の接穂得し
記念日のなほもろもろや古暦
鼻とほるごとき藁の香年の市
年忘雨を出掛けてゆきにけり
会へぬ人会はざる人や年つまる

瑞の雪

大竹 淑子

山幸の神の宮居や瑞の雪
門の松内に叩きの音のして
千貫松夫婦松ある恵方道
冬萌や松をこぼるる松ぼくり
叡山の空に日の在り雪しまき
小鳥斜に天を目指せる雪間かな
月齡の暦新月寒の内

寒 椿

宮川みね子

ギプス切る雪の寒波となりにけり
桐箱のむらさきの紐淑氣満つ
百巻の書に日の当る二日かな
竹林に冬の夕焼水の音
波音は島をはなれずどんど焚く
雨音もひとつの調べ冬座敷
寒椿残れる生命火となるか

小正月 浜 福恵

静寂の雪により添ふ三日かな
ポツペンを吹いて仏とあそぶかな
観音堂へ道問うて葱給はりぬ
天空に城野に冬川のきらめきて
竹田城
鯨供養の塚を抱きて山眠る
鯨供養の海がうがうと波の花
海へ来て海を拜む小正月

寒 月 山田 暢子

除夜詣闇動かして列に就く
棉虫の一つづつ消え母残る
寒卵置けば静かな刻生る
寒月や母はわが子も忘れたる
夫に貸す両手セーターなど着せる
みほとけも夢見る頃か雪積る
金縷梅や八十歳へまた一歩

歳 送 る 門伝 史会

大枯野水の中まで及びをり
湾ごしに立山連峰鯨おこし
風花や海へなだるる千枚田
切り岸に立てば寄りくる波の花
風花の輪島朝市通りかな
降る雪に目鼻なくして羅漢仏
家中を灯して歳を送りけり

「淡交」以後(五十二) 野沢しの武

夏帽を残して何も言はず逝きし
地震去れば拳突き上げ雲の峰
甚平に袖を通して書信読む
老妻に見知らぬ余所着桐の花
紫陽花を今年も咲かし廃医院
茅の輪出店昼まだ空うの金魚槽
注連太き银杏神木茅の輪立つ

懸りゐる

瀬戸 悠

笹子鳴く離島に届く米醬油
風紋の波なす砂丘春隣
雨上る日差しの中の梅の花
東風吹くや硝子の泛子が日を返す
二の丸の土塁恋猫駆け行けり
点されでガレの壺ある朧かな
燕来る橋のたもとでの理髪店
酒槽にのこる酒の香花の冷
蛇の衣酒船石に懸りゐる
境内を裏に抜けたり繭の花

山河集

同人作品



神蔵
器選

あらたまの雪一滴大河なす
上村 葉子

冬麗や櫛大樹と音楽隊
竹刀振る横一列の寒稽古

さみどりのなづな七草打ちにけり
楳やまだまだ学び足らざりし

一本の松より開く初景色
内藤 静

江戸よりの鐘が鳴るなり寒牡丹
万両や返せぬものを恩といふ

力石蹴つて飛び立つ初雀
助六の大羽子板を観音に

森屋 慶基

人日やひとつふたつと鉦の音
二日はや待つた無しなる雪卸
町の色空の色消し雪降り

生きてゐる限りは雪を掻きにけり
最後まで賽の目切りに雪卸

森田 節子

着ぶくれの人と眼が合ひすれ違ふ
臘梅の影濃くありぬ八一歌碑

洛中の景一望や風花す
寒夕焼九輪の珠のうたひ出す

小林 和子

冬木立モスクの青きドームかな
初湯殿檜の桶のひびき合ふ

目のあきし達磨炎となりどんど果つ
烏川どんど櫓の火に焦げる
初鏡曾て妻の日看取りの日
行火抱き一店一味赤蕪売る

◇特別作品◇(抄)

長崎行

杉本葉王子

春の坂ゆるやかにして如己堂
春風と三度尋ねし如己堂
春の風二畳の部屋の人はいま
形見にはロザリオと骨花堇
水仙の香り立つ部屋にデスマスク
如己堂出て一匹の春の蝶
春風やオランダ坂は直ぐ終はる
カップルのシャッター押しぬ春の坂
春風や長崎の町は坂ばかり
春風や活水女学院の分厚き門

風土独語／神蔵器



遺言に維持装置不要花八つ手

杉本薬王子

冒頭から私事で申し訳ないが、私は昭和二十二年、明治に入学したが、通学は一年の一学期だけで、暑中休暇が終っても、再び白雲なびく駿河台に通うことはなかった。

療養所はどこも三年待ち、母は早く亡くなっており、七十の老婆に看護され、かつて養蚕の盛んであった頃の古く大きな家の二階のひと間が病室であった。

すぐ近く、私の家からは百メートルばかりの柿の木畑に、同じ神蔵姓であったが、直接は関係はない東京で鋳職をしていたという夫婦が疎開して来ていた。

その奥さんが、見るに見かねたものか、ある日、たまたま配給のあったスケトウダラの煮付を、真っ白い布巾でかくすようにして二階に上がって来た。

戦後も間もない能ヶ谷は、まだ結核患者の家は、まるで村八分のようなものであったから、何より近所の人が直接来てくれたことがうれしかったが、これは気まぐれの一度だけの夢と思った。

ところが次の日もその次の日も、何かしら少しでも栄養になるような補助食を作って来てくれた。配給品などめつたになかった時代であったから、知り合いの農家から分けてもらったり、野のものであったり今では想像も出来ないことであった。雨の日も風の日も嵐の日も、結局丸五年余、一日も休むことはなかった。病中、ストマイが発売されたが、当初はあまりにも高価で買ってもらうことは出来なかった。しかし、手厚い看護を受け、真心によって私は九死に一生を得て奇跡的に快復した。

昭和四十一年、母は粕江の東京慈恵医科大学附属第三病院に入院した（夫妻に子供が無かったので後に私は養子縁組をした）。

病名は肺癌ということで、肺の患部の摘出手術だけで一応退院した。一応ということは、肺になお患部が残っているということか、それとも、他に転移しているということか、説明はなかったが、あと半歳と言われた。

再発は医師の予言に近く、約八ヶ月後にやって来た。すぐ入院したが、それからの進行は驚くべき速さで、前の入院と全く異なるのは激痛をとまなうことであった。はじめのうちは飲み薬や散薬、私などには全く解らないが、点滴の中にもいくら痛み止めが入っているのか、少し眠る時もあったようだった。しかし、それも二ヶ月以上も過ぎる頃から全く効かなかった。

結局、最後に頼るのは直接鎮静剤の注射しかなかった。一本の注射で母はうのように静かになり、げっそりと頬のこけた横顔

を灯にさらしてただ眠っている。それも、麻酔の効いている時だけで、その時間はほとんど少なくなっていく。母が目覚ませば痛み苦しむので、私は見かねて先生を呼びに行く。先生はその度によく来て下さったが、そのうちあまり度重なると「すぐ行きませう」と言って下さるのだが、なかなか来ては下さらない。先生としては強い麻酔をあまり短時間で使用するわけにはゆかないのである。と私の方でも解つていても、母の苦しみがどうにもしてやれないので、またまた、先生をむかえに行く。そんな日の続いてきたある日、先生から私に

「これ以上、点滴をつづけても……もうねえ」と言われた。

その頃、母は二本の点滴を一瞬も休むことなく続けていた。

「……」

私は黙つて頭を下げた。母は翌日、昭和四十二年六月十一日早朝亡くなった。母は維持装置などしていなかったから、点滴を止めることは、維持装置を取り外すことと同じであった。このことはこの善悪とは別に、いまでも重く心に残り、母にあやまりたい。

さて、後になってしまったが、掲出句はこの句の評価とは別に「維持装置不要」は、たとえ本人であつても賛成出来ないし、またそんな権利もないのではないか。例えば白洲次郎の遺言「葬式無用、戒名無用」などとは全く異なるものである。

(以下略)



風土集



神蔵器選

介護施設の帥を児舞ふ
ネクタイを師に誉められし三日かな
遺言に維持装置不要花八つ手

京都 杉本葉子

有馬温泉
人形筆からくりも見せ二日かな
突き出しはのれそれといふ春の雪

注のむそれとはあなこの難儀

春の雪カフェラテにはシユガー抜き
藍甕に藍睡みゆく氷柱かな

高槻 浅田光代

この街をわが街とせむ初日の出
三が日すぎたる障子明かりかな
まないたに山河ありけり齋粥
胸でノック仕事始のボールペン
臘梅や山門高き東慶寺
開かれしままの花伝書松七日

平塚 中沢三省

床上げを了へし少女の初鏡
少年に碧き空あり冬萌ゆる
残されし日の匂ひして菊を焚く
一本の魁夷の道に年明くる
通りまで一人の幅の雪を搔く
甘くなる寒に入りたる葉物かな
測量の靴踏み入るや冬菜畑
人日やクレイン大きく動き出す
荒縄を巻く長靴や雪を搔く
雪の夜心臓三百グラム也
金比羅に潜水艦絵馬初松籟
獅子舞の口に手の生ふ祝儀かな
大風はひと日で止まず初天神
おくつきへ焚火の香る深大寺
冬木の芽むかしは舟で行き来して

川崎 鈴木庸子

相模原 岡本尚子

川崎 内藤静